

牛群検定通信 No87

～気温と暑熱対策～

西日本では梅雨もあがり本格的な夏を迎えていると思います。取りも直さず暑熱対策を欠かせない季節です。みなさんの検定成績表には、気象庁のアメダスから送信された気象情報が表示されています。今回は暑熱対策について気温を中心に紹介します。

1 気温表示

検定成績表に表示されている気温は、我が国の誇る気象観測システムであるアメダスによるものです。牛舎の気温ではありませんが、あなたの牧場から一番近いアメダス（平均10km程度）の気象情報です。気温については最高、平均、最低が表示され、降水量、日照時間も表示されています。これらは暑熱対策の目安として利用することができます。

- ・最高気温が24度以上になると乳量が下がり始めます。
- ・平均気温が23度以上で初産牛、21度以上で2産以上の牛の乾物摂取量が減少します。

2 送風扇（扇風機）

代表的な暑熱対策です。近年ではほとんどの農家に設置されています。是非とも効果的に利用していただきたいと思います。牛の首まわりは体表温度が高い部位なので特に風が当たるようにしてください。体感温度への影響を、家庭用扇風機のおおよそ1m程度の距離で示しますと、次の通りです。

扇風機：弱 風速約1～2m 体感温度：気温を約6度程度下げます

扇風機：中 風速約2～3m 体感温度：気温を約8.5度程度下げます

扇風機：強 風速約3～4m 体感温度：気温を約10.4度程度下げます
気温30度となる真夏日でも効果的に風があたれば、乳量の下がりをはじめとなる24度まで体感温度を下げる事が出来る事が分かります。

3 夜間の送風

日本飼養標準によると、夏季に日中高温であっても夜間の気温が22度より下回れば、乳量の減少を緩和できると記されています。都府県の多くの地域では7, 8, 9月には最低気温が22度以上となってしまいますが、夜間の送風扇運転を積極的に行えば、乳量減少を緩和できることを意味します。

4 十分な飲水

送風扇と並んで暑熱対策の大きな柱が飲水になります。乳量40kgの場合は、飲水は120kg必要とも言われています。ウォーターカップの汚れや詰まりは、特に気をつけてください。繋ぎ飼いの場合、産次を重ねた大きな牛と初産牛を並べると、初妊牛が十分に飲水できないこともあります。フリーストールの場合でも、十分なスペースを取った適切な水槽の設置が必要です。水槽の汚れは、特に気をつけてください。十分に飲水が出来ない場合、唾液分泌が減ることから反芻が減り、食欲減退を招き、ルーメンアシドーシスや蹄葉炎を誘発させてしまうことが知られています。